第35回 7月4日 明日に伝える高松空襲
「忘れられた声を聴く」
杉村智子

私たち「8・15戦争体験を伝える集い実行委員会」は、毎年7月4日に高松空襲の被害と体験を後世に伝えることを目的に集会を開いており、今回で35回目となり、参加者は64名でした。

戦後80年を迎えた今年は奇跡的に空襲の被害を免れた栗林公園の伝統的建造物「商工奨励館」で開催しました。かつて高松では「空襲が始まったら栗林公園で落ち合おう」という言葉が市民の間で交わされていました。しかし、栗林公園は焼夷弾ではなく爆弾で狙われ大勢の方が犠牲になりました。当時この栗林公園を通り命からがら逃げたという戸祭恭子さんの体験談をお聞きしました。北門付近で目撃されたあるエピソードも語られました。そこでは、すでに息絶えた母親の乳房を必死に探って泣き続ける赤ん坊の姿を目にし、どうすることもできずにその場を後にしたという体験です。あまりにも辛く、長年語ることができなかったこの体験が、ようやく語られました。

参加者全員で慰霊のランタンを手に北門から中野稲荷神社へ移動しました。ここには、空襲で石灯籠の笠が落ち、戦後に針金で括って修理されたままの姿が今も残っています。参加者からは「JRを利用するたびに通っていたのに、今日初めて知りました」との声も聞かれました。

最後に六角堂慰霊碑へ移動し、1990年に発行された手記の中から、朝鮮半島から移住してきた家族の体験談が朗読されました。朗読したのは、朝鮮半島にルーツを持つ現18歳の青年です。手記では、当時7歳だった春満（チュンマン）少年が、創氏改名で本名を奪われ、差別と極貧の中で空襲に遭い、兄弟を失い、父母も大やけどを負うという悲惨な体験が語られています。その壮絶な内容に、会場は静まり返りました。

この集会を通して、私たちは戦争の「被害の歴史」だけでなく、「加害の歴史」もきちんと伝えていくことの大切さを、改めて胸に刻みました。

全国いっせい「YOUTH宣伝」
未来を変える声
高松

民青同盟香川県委員会は6日、丸亀町グリーン前で全国いっせい「YOUTH宣伝」を実施しました。シールボードを使った対話やビラ配りを行い、約30人と対話しました。長尾候補も合流し、訴えを行いました。

対話では、消費税減税や賃金アップにシールを貼る人が多くいました。「消費税を減税してほしい」との声に対し、共産党の財源論を説明すると、「財源がなければいけない。共産党は頼りになる」との反応がありました。「選挙区は長尾まさき、比例は日本共産党でお願いします」と伝えると、「わかりました。投票します」と応じてくれました。かつて自公政権を支持していたという方からは、「支持してきたけど、自分の暮らしは良くなるどころか悪くなっている。自公政権ではダメだと気づき、今は他の政党の政策を吟味している」と話し、「政府は“消費税を減税すると社会保障の財源が減る”と言うが、増税しても暮らしは悪化している。言っていることとやっていることが矛盾している」と指摘。大企業・富裕層への応分の負担を求める共産党の財源論を示すと、「共産党は財源も示していて頼りになる」と、党への支持に応えてくれました。

また、「えっ！？共産党ですか？いつも共産党に投票しています」という声もあり、対話が弾みました。

長尾候補は訴えの中で、大軍拡の問題や消費税減税を語り、「自公などと本気で対峙できる候補は長尾まさきしかいない」と力強く訴えました。

民青同盟の藤沢県委員長は、「消費税減税はすでに“当たり前の世論”となっている。むしろ、減税に反対する人には出会わなかった。消費税減税が今まさに大きな争点であることを実感できた。私たちの頑張り次第で、共産党躍進のチャンスをつかめると確信した」と語りました。

猛暑の中 広がる共感と支持

参院選挙が始まり、白川よう子比例候補は17県を駆けめぐっています。県内では長尾まさき選挙区候補が猛暑の中、奮闘しています。県内各地で奮闘している支部の取り組みなどを紹介します。

参院選がスタートしました。参議院でも自公を少数に追い込み、与党に助け舟を出す維新や国民民主党などにも審判を下す選挙戦。どんな新しい政治をつくれるのかと、今からワクワクです。

私は、この間、西日本17県を駆け回り、暮らしの切実な声を聞いてきました。「お米の値段が上がって、おかわり禁止になりました」と言う小学生。「6枚切りの食パンで1週間をしのいでいる」という年金暮らしの高齢者。私はこうした「いのちの声」を国会へ届け、力を合わせて暮らしを支える議席となりたい。

国民の暮らしは守らなくても、「消費税は守り抜く」という自民党に、鉄槌を下しましょう。

この選挙戦で政党や候補者から、「日本人ファースト」などと言って、外国人に矛先を向ける主張が広がっています。しかし、賃金が上がらないのも、社会保障が貧しいのも日本の政治の問題です。差別を煽動し、ヘイトを撒き散らすのは許せません。多様性を尊重する政治が求められています。

女性へのバッシングもひどいです。子どもを産ませることが前提かのような主張とも正面からたたかっています。

自公が少数になった国会では、「選択的夫婦別姓」の法案が28年ぶりに国会審議されました。「自分の名前で生きたい」と求める、あなたの声が政治を動かしています。結婚しても、子どもを産むか産まないかも、どんな選択も1人の生き方として大切にされる社会をいっしょにつくりたい。

勇気りんりんエッセイ
参議院比例候補　白川よう子

《長尾候補者カーの乗員報告》

長尾候補は4日、炎天下のさぬき市、三木町、東かがわ市を回りました。マルナカ長尾店前では「トランプや大企業の言いなり政治はダメ」と声援が。東かがわ市では友人の家族から激励され、「10人に支持を広げる」と約束されました。

演説を聞いた人から「共産党の言う通り」と対話も弾みました。行く先々で家から出てきて聞く人も多く、温かい雰囲気に包まれています。三越前では喫茶店のマスターがカンパを寄せました。

《各地からの報告》

◆「もう自民はやめた」

土庄町では、自民党の活動家とされた社長が「これまで社員に自民党を押し付けていたが、もうやめた。長尾候補のビラを見せるよ」と語りました。

◆市民の広がり

元教師の党員Aさんは、教育のゆがみに怒り、初めてランチ仲間に支持を訴えました。Bさんは親兄弟や友人に赤旗の切り抜きを見せ、「大企業が減税される一方、消費税が上がるのはおかしい」と訴えると、共感を得ました。

◆5中総を力に

高松市の山田支部では5中総の視聴後、党員が日刊紙購読とビラ配布も。

◆「はがき」から「ビラ」へ

教員のKさんは教え子に「はがきを出せるか」と尋ねると「親に1枚なら」と返事。その後、ビラ3枚を預かるなど広がりを見せています。

◆「このビラを渡したい」

日曜版読者Dさんは赤旗号外を見て「職場の仲間に渡したい」とビラ10枚を求めました。